

シン・研修報告書

富山県医療ソーシャルワーカー協会

テーマ

ソーシャルワーカーに必要な相談援助面接力の基礎
～演習を通して～

講師：渡部 律子先生（日本女子大学 名誉教授）

開催日：令和3年9月4日（土）、9月5日（日）
Zoom研修

参加者の声：富山赤十字病院 寺林 麻子さん

「私もう疲れてしまって…。このままでは共倒れになりそうで、どこか夫を預かってくれる所はありませんか。」

ソーシャルワーカーのあなたは、電話を取ったときに開口一番こう相談されたら、なんと言葉を返すだろうか。

今年度の定例研修会は、5月の記念講演会に引き続き渡部律子先生に講師をお願いし、相談援助面接について学んだ。

研修の前半では、ソーシャルワークに**面接力が必要な理由**を確認し、各々の面接力のチェックをおこなったあと、モデルとなる具体的なケースを使って面接に必要な要素について理解を深めた。

そして今回の研修のメインは後半のロールプレイを通しての演習だった。2日間それぞれ参加者が事前に提出した事例（自らが行った中で気になる面接の一場面の逐語録）の中から1つが選ばれ研修前に配布されていた。

当日は提出者がクライアント役、他の参加者の中からソーシャルワーカー役や他の家族役が選出され、面接場面を再現、それを皆で観察した上で、小グループに分かれて感想や気づいたことなど話し合った。

ソーシャルワーカーが設定していた面接のゴールとクライアントが期待していたことが一致していたか、クライアントの発言の意図やワーカーの反応によりクライアントに伝達されたメッセージ、ワーカーの感じていた引っかかりの原因がどこにあったのか等を参加者皆で探っていく過程で、改めて自らの日頃の面談について深く考えさせられた。

特に、私は2日目の事例に選んでいただきじっくり自身の事例について検討いただけたことで、**目の前の面談相手の話を聴いているつもりで聴けていなかったことや、クライアントの要望に応えるつもりでありながらクライアントの本当の思いには沿わないゴール設定をしていたことなど、改めて気付かされた。**

さて、冒頭の相談、これは5月の講演会でもVTRが流れたのでご存じの方も多いかもしれないが、渡部先生も監修に関わられたDVD（※1）の電話での相談場面の最初である。

今回の研修でも前半でモデルケースとして提示された。エキスパートの「近藤ワーカー」は、「どこか夫を預かってくれるところを」という言葉に引っ張られることなく、まずは相談者である妻にしっかり向き合い、妻が「疲れて」いるというメッセージを丁寧に聴き取る。

そして妻を主体としながら手際よく妻の状況を確認していくとともに、妻の信頼を得て妻自らが次の面談を望む状況を作ることができる。

5月の時点では「すごいワーカーさんだなあ」とは思ったが、何がすごいのか、自分との違いは何なのか、明確にはできなかった。

自身の面談の逐語録の作成から始まる今回の研修により、相談援助面接力の大切さや面接に必要な要素を改めて確認できたことで、今なら近藤ワーカーのすごさを言葉にして表すことができるし、**それを自分の実際の面談に少しでも取り入れられるよう努力することはできる気がする。**

私たちソーシャルワーカーは、毎日のようにクライアントとの**面談を重ね**ている。私たちが責任を持って**クライアントとの関係を築き**、よりクライアントにとっての最適解に近づくためのアセスメントをするために、相談面接の力は欠かせない。

今回の研修に留まらず、引き続き自らの面接を振り返り、考え、学ぶ機会を持ち続けるようにしたい。

※1奥川幸子・渡部律子監修（2007）『DVD面接への招待』中央法規出版

参考文献 渡部律子 著（2019）『福祉専門職のための統合的・多面的アセスメントー相互作用を深め最適な支援を導くための基礎ー』ミネルヴァ書房

広報事業の一言つぶやき

日々の業務で多くのクライアントとの面談を行うMSWとしては、面接力は非常に重要な力ですね。この力を専門職として高めるため、寺林さんのコメントのように日々の実践と向き合い振り返りながら、専門職として学ぶ姿勢を忘れずに、それをクライアントに還元することが大切ですね。

「専門職として自己覚知は忘れてはいけない」と、そんな思いを感じずにはられない素敵な内容でしたね。

シン・研修報告書

富山県医療ソーシャルワーカー協会

テーマ

第15回 富山県ソーシャルワーカー三団体合同研修会
地域の課題にソーシャルワーカーとしていかに向き合うか
～「8050」問題と引きこもり支援より～

講師：田村 綾子 先生

(公益社団法人 日本精神保健福祉士協会 会長
聖学院大学 人間福祉学部 人間福祉学科 教授)

開催日：令和4年2月26日(土)Zoom研修

参加者の声：アルペンリハビリテーション病院 戸田 友理恵さん

引きこもりの方の支援に携わるにあたり、本人が問題視していなかったり、触れられたくない問題だったりすると思います。その為、まずはどこを糸口に本人と関わっていくことができるのか、アセスメントすることがとても重要だと感じました。今回の事例検討でも「浪費」は「社会とつながる場」だと話をしてくださった場面があり、私は学生時代の事例検討で、視点を变えることで課題は強みにもなり得ると繰り返し考えていたことを思い返しました。私は担当ケースに携わっていると、視点を变えてみることや、一歩引いてケースのことを考えることができず、いつもどうしたものかと悩んでいるように思います。そのため一呼吸おいて支援について改めて考え、また別の方にも意見を伺いながら今後の支援について検討を重ねていきたいと思います。

また当院には外来がないこともあり、在宅復帰された時点で地域に任せきりになっていることが殆どです。その為、研修の中で「一度かかわったのであれば一生担当」という言葉を聞いて、私はそれほどの覚悟の下関わることができているのかととてもドキッとなりました。自身が携わっている方はこれからも地域で生活を送り、地域の一員であるということを忘れず支援を行っていききたいと思います。

回復期の病院でも時折、引きこもりだったという方が病気になり入院されることがありますが、今まで担当を持ったことがなく恐る恐る今回の研修に参加させていただきました。私はまだ経験も浅く、知識も少ないため、参加されている皆さんの意見や思いを直接伺うことができ、刺激を受けたと同時に自身の引き出しを増やすきっかけになったと思っています。貴重な機会を作ってください本当にありがとうございました。

広報事業の一言つぶやき

戸田さんのコメントからも、今回の田村先生の研修内容の素晴らしさが分かりますね。また、戸田さんの率直な想いは我々が専門職として働く以上常に感じ続けるジレンマにもつながりますが、それがまた専門職としての専門性を高めるきっかけづくりにもなりますね。是非、これからもお互いに支え合いながら富山県のソーシャルワークを盛り上げていけたらと思います。